



## 学期制に対する雑感

西岡牧人

機能工学系助教授

私が本学に着任したのは4年前の春です。まだまだ新参者です。本稿では新参者の目から、本学の学期制についての感想を述べたいと思います。

私は本学への着任以前に名大に助手として九年間勤務し、またそれ以前は東大で学生として八年間過ごしました。学生時代には地方出身者のための小さな寮でおおよそプライバシーに無縁な共同生活を送っていましたが、そこには東大の他に一橋、早稲田、慶応、中央、駒沢、東洋の学生が入り混じっており、いろいろな大学に関する学生サイドからの情報を結構詳しく知ることができました。更に助手時代には一年間米国のプリンストン大学で客員研究員として過ごしましたが、研究室の博士課程最終学年の二人とは年齢的に近いことから連帯感が芽生え、機会あるごとに彼等から学生生活について教えてもらいました。そして日本の大学との違いについていろいろと新鮮な発見

をすることがありました。このように、複数の大学に関する（学生から見た）情報に普通よりは多く接してきたと、私はささやかながら自負しています。

### 三学期制への戸惑い

本学に着任して間もない頃は、その非常にユニークな学内制度に対して驚きと戸惑いの連続でした。三学期制もその一つでした。それまで知っていた大学は全て二学期制だったので、大学というものは二学期制なのだとは私は信じて疑わなかったのです。御存知のようにこの三学期制はいくつかの本学独自の特殊事情を生みだしていますが、その中でも当初私が戸惑ったのは次の三つでした。

- (1) 1コマが75分である。
- (2) 昼休みが11時25分に始まる。
- (3) 7月初めから夏休みが始まる。

まず(1)の75分授業は、実際に講義を担当してみると一般に行われている90分

授業に比べてやはり短いと感じました。私は授業の最初に少し時間をとって前の時間の復習のようなことを簡単に話す場合が多いので、特にそう感じるのかも知れません。そしてしだいに講義に調子が出てきたところで時計を見るともうあと10分しかないということがよくありました。一方、学類によっては2コマ連続、即ち間に15分の休憩を入れた150分授業を多く採用している場合があります。大学院は更にこのパターンが多いようです。これは、学期完結のために週二コマ必要である科目を、教員の学外活動(学会や委員会等)の支障にならないように同じ日に固めていることが理由だと思われます。私も現在2コマ連続の授業を担当していますが、150分間集中力を持続することのハードさには正直まっています。勿論教員だけでなく学生も大変なはずで、半分寝ている学生はともかく真剣に聞いている学生は相当なエネルギーを消耗していると思います。1コマ90分であったらさすがに連続180分の授業を組むことはないと思いますが、本学の場合150分なら何とかなると考えられたのでしょう。しかし私は150分でも既に常人の限界を超えていると思います。米国の或る州立大の教員をしている知人にこのことを話したら「学生が150分も授業

に集中できるのか!？」と非常に驚いていました。

(2)については、昼休みになっても一向に腹が減らないことに閉口しました。今でも閉口しています。一般の職場や学校では昼休みは概して12時から始まりませんが、その場合でも普通の人にとっては朝食と昼食の間は昼食と夕食の間よりも多少短いものです。職住接近の筑波学園都市の場合は尚更です。本学ではそれを更に35分も早めたわけですから、昼休みには無理にメシを口に流し込み、夕方には腹がグーと鳴るという困った事態になるのは当然のことです。もちろん教官は3限の講義が無い限り12時過ぎに食べるができますが、それができない学生は可哀想です。メシ?そんな下らぬことを話題にするなどお叱りを受けるかも知れませんが、生活リズムを変に狂わせるのはやはり問題があると思います。

(3)については、私は小中高大と梅雨が明けて本当に暑くなった頃に夏休みに入ることに慣れてきましたので、本学では夏休みの始まりといってもまだ梅雨の真只中で結構肌寒い、ということに季節感が大いに狂いました。私には、「夏休み」や「夏季休業」という語には暑くて授業にならないから休むというニュアンスが感じられるのです。そして、学生た

ちはこんなに早い時期から帰省やアルバイトをするのだろうかと思いました。勿論これは単に季節感だけの問題で、例えば米国の多くの大学では6、7、8月という3ヶ月近い休みがあるわけですから、「夏」という文字を気にせず単に学期間の長い休業と思えばいいのでしょうか。

### 三学期制の利点

最近学系のメイリングリスト上で学期制に関する議論が活発になされ、私も三学期制の利点や、本学が三学期制を導入した経緯についていろいろと知ることができました。利点として挙げられる最大のものは何といっても次の二つでしょう。

(4) 長い夏休みに学期が分断されないので授業の効率がよい。

(5) 9月入学でも授業の遅れをわずか三ヶ月に抑えられるので帰国子女の受け入れに都合がよい。

ここで(4)についての補足ですが、国内の多くの私立大は二学期制でありながら一学期を分断せずに7月末に終了できるのは、教室に冷房設備があるからだと聞きました。国立は贅沢ができないので、二学期制の場合七月途中で一学期を中断せざるを得ないわけです。

二学期制国立大のこの「分断」については、私も学生時代に恨めしい思いをしました。私がいた寮の私立大の学生は夏休みに完全にリラックスして実に楽しそうでした。一方国立の学生は9月に入るとまもなく試験が始まるため、夏休み中も勉強のことが頭を離れずあまり豪快に遊ぶことができませんでした。私は帰省するときに重い教科書を何冊も段ボール箱に詰めて実家に送り、図書館に通ってせせせと勉強したことを憶えています。しかしそうやって、学期中に理解できなくても夏休みに時間をかけたおかげで深く理解できたことが沢山ありました。このように私の場合、学期の分断はむしろ遊ぶことに対して効率が悪く、逆に勉強に対しては効率が良かったわけです。そういうわけで私自身は、少なくとも「教員側からの視点」からは、学期分断に悪い印象を持っていません。

(5)については、本学が帰国子女を積極的に受け入れる努力をしていることは確かに素晴らしいと思います。ただ私が少々腑に落ちないのは、帰国子女に対して補習等の特別メニューを用意し、また彼等だけ特別に7月卒業などの面倒な目にあうというのは、やはり本来あるべき姿ではないのでは、ということです。

本来ならば世界中の大学が同じ時期に

入学卒業を行い、受験や就職において国際的に交流できるのが望ましいはずで、従って私は日本の大学も九月入学になってほしいと思っています。そうすれば帰国子女の入学だけでなく学生の交換留学、学者の交流もスムーズに進みます。ただしその場合は卒業生を受け入れる側も関わってきますので日本の社会全体が移行しなければなりません。そんなことが実現できるはずがないと言われる方も多いと思いますが、私は長い時間スパンで見ただけ日本は必ずそういう方向に向かって変化していくと思います。国内標準がいつも世界標準（米国標準？）に敗れ去るのは不愉快ですが、この九月入学の場合は英語の公用語化などと違って日本のアイデンティティーが喪失するほどのことではないですから、導入する価値は高いと思います。そしてそれが実現できた場合には上に挙げた三学期制の利点（即ち二学期制の欠点）は消滅し、学期制の議論は純粋に授業や学習の効率に関する議論に帰着することができます。

### どんな実験も必ず成功する？

私の専門は燃焼学ですが、実験ではよく失敗します。特に新しい実験は最初必ずと言っていいほど失敗し、それにめげずに根気よく改良を重ねた末に何とか成

功に行き着きます。時には最後まで結果が出ない完全な失敗もあります。

「筑波大は実験大学である」という言葉を時々耳にします。即ち非常に巨大な実験プロジェクトです。私の燃焼実験などは失敗しても損失はたかが知れていますが、巨大プロジェクトの場合は投入金額が大きいため、失敗した場合に責任問題が持ち上がるのは当然です。しかし規模が小さかろうが大きかろうが、本当に斬新な試みの場合は失敗する可能性がそう低いはずはありません。問題は失敗を認めるかどうかということでしょう。もし、本学の開学以来の新しい試みが全て成功であったという話があるならば、それはいかにも胡散臭い話です。「やってみたら効果が無いので元に戻す」ことも真の改革の一種だと私は思います。

本学の三学期制が正解だったか否かは複雑な問題で、私にはとても判断できません。結局、今後三学期制を維持するか二学期制に移行するかは、どの利点を選びどの欠点を許容するかということでしょう。ただここで私が思うのは、もし二学期制賛成論に対して「他大学と同じに戻すなど、そんな後ろ向きの姿勢に見えることができるか！」というただそれだけの理由で批判が出るとすると、むしろその批判の方が実験大学らしからぬ硬

直した姿勢だということです。まあそんな姿勢の人はいないと思いますが。

飯は12時過ぎに食べたいですね。

(にしおかまきひと 燃焼学専攻)

いずれにせよ、私としてはやっぱり昼

